民衆の中の親鸞

平野 修

同朋選書 18

民衆の中の親鸞　目　次

身に展開する浄土の真宗……1
身を生きる　1
身の発見　6
身のすくい　11
身へのうなずき　16
みなただ人として　21
親鸞が見つめた人びと　26
人生の教行信証　31
念仏往生の道……37
自身の一大事　37
すすめられ教えられ　42
三宝の歴史　47
自身への目覚め　52
業の身を生きる　57
念仏のえらび　63
仏陀との出会い　67
知らされて知る　73
民衆の仏道……79
悲願の一乗　79
行・善のかなわぬ者に　84
仏おわします　89
「はずみ」の存在　94
機が定まる　100
南無阿弥陀仏をとなうれば……105
「人」となる道　110
流転　115
如来、我らの信となる　121
生きぬく道　126

この世が課題となる　132
浄土との出会い……139
一線を画す世界　139
生死を出る　144
穢身・穢土と見い出したもの　149
照らすものとの出会い　155
この世界への責任　160
目覚めと行為　165
叫びに応えて　171
場と身の転換　176
民衆の生きる目印　181
民衆の中の親鸞

＊本書はラジオ放送「東本願寺の時間」で放送（一九八八年七月～一九八九年六月　全三十五回）されたものをまとめたものです。

身に展開する浄土の真宗

身を生きる

これからしばらくにわたって、親鸞聖人（以下、親鸞とする）のことばに依りながら、浄土真宗の世界を考えていこうと思います。

次のようなことばがあります。

故法然聖人は、「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覧じては、往生必定すべしとてえませたまいしをみまいらせ候いき。ふみざた（笑）して、さかさかしきひとのまいりたるをば、往生はいかがあらんずらんと、たしか

にうけたまわりき。いまにいたるまでおもいあわせられ候うなり。

（『末燈鈔』聖典六〇三頁）

このことばは、親鸞八十八歳の時の手紙の一節です。ご承知のように、親鸞は西暦一一七三（承安三）年に生まれ、一二六二（弘長二）年、九十歳で亡くなっておられますから、八十八歳といいますと、その最晩年にあたります。

今、読みました手紙の最初に、「故法然聖人」とありますのは、親鸞にとって「よき人」「先生」にあたります法然房源空上人（一一三三～一二一二）のことであります。親鸞は生涯、法然上人を「よき人」と仰がれたのですが、その「よき人」とは、わずかに六年間のおつきあいでした。現代の私たちが多くの人たちの中にありながら、あたかも風吹きすさぶ荒野の中にいるような自分を見つけるとすれば、二人のような出会いがこれまでの人生の中でなかったことを意味するのではないでしょうか。それだけに、この二人の出会いの深さ、確かさがうかがわれます。

親鸞は二十九歳のとき、六十九歳の法然と出会い、三十五歳のとき、念仏禁止の事

件でそれぞれ流される身となって、二度と相会うことがありませんでした。別れて五十年以上たって、親鸞が八十八歳になっても、「いまにいたるまでおもいあわせられ候うなり」と、まるで昨日、今日のように思い出されたことが、「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」ということだったのです。

この亡き法然上人のことばは、いつもいつも親鸞は時にふれ、折にふれて、うなずかれていたものに違いありません。なぜかと申しますと、親鸞が自らを名告るときに「愚禿釈親鸞」と「愚」、つまり、「愚か」という字を最初に置かれているからです。先の手紙の中では「愚」は、「ものもおぼえぬあさましき人々」といわれています。「ものもおぼえぬ」とは「物事の道理をわきまえない」という意味ですし、「あさましき」とは「生活がみじめで、貧乏でいたましい」という意味です。

これらの意味から具体的にどのような人びとが考えられるでしょうか。これについてまず思われることは、「身」のことです。「身分」とか「我が身」といったときの「身」です。この「身」ということは法然や親鸞といった人たちだけではなく、現代を生きる私たちにとっても、たいへん重要な意味をもつものです。といいますのは、

「身」のところに生・老・病・死があるからです。つまり、「身」が生まれ、「身」が死するのです。

また「身」には、さらに大事なことがあります。それは、食べることと、男・女の性のことです。そして、この二つは繰り返すという性質をもっています。特に食べることの繰り返しが重大です。それは、老い・若き・男・女を問わず、繰り返し繰り返し食べなければ生きられない身を、私たちは「我が身」としているからです。繰り返し食べることができなければ、私たちの「身」はまちがいなく死に至ります。ですから、私たちの人生のほとんどは、この繰り返し食べることの確保に費やされ、そのために多大な苦労がはらわれています。

ある老人のことばを思い出します。戦中・戦後、文字どおり世の辛酸をなめて齢八十近くになる人が、若い人から、「いろんな事があって、人生が長く感じられたでしょうね」と問われて、「いーや、ただ食べて通ってきただけだ」と答えられたそうです。これは、たいへん重いことばです。繰り返し食べねば生きられない身を「我が身」とする私たちに深くうなずかれることばでしょう。

繰り返し食べることができなければ生きられない、と申しましたが、繰り返し食べることが困難な問題をもっております。それは、ある人はそんなに苦労せずとも繰り返し食べることができ、ある人は朝早くから夜遅くまで働きづめに働いても食べることに困難を感ずる、ということがあります。ここに、世の中の仕組みが考えられます。世の中の仕組みに受け入れられる人たちは食べやすく、仕組みに巻き込まれたり、はじかれたりする人たちは食べにくいといわなければなりません。

このことは、親鸞の生きた鎌倉時代も、今日の私たちの時代も同じことでしょう。先の手紙で「あさましき人々」と呼ばれた人たちこそ、繰り返し食べることに困難していたのでしょう。徹底して「身」に振り回され、「身」に埋もれきって生きている人たちです。繰り返し食べることが困難であれば、「身」はやせ衰え、老いも早く来ますし、病もまぬがれません。したがって、いつも死の近くにいなければなりません。法然・親鸞の眼は、「我が身」を通して同じ身を生きる「あさましき人々」にそそがれていたのです。そして、この「身」のところに浄土の真宗は展開するのです。

身の発見

前回、「ものもおぼえぬあさましき人々」の上に法然・親鸞の眼がそそがれていた、と申しました。そしてまた、繰り返し食べなければ生命がつなげない身を、「我が身」としていることに関係しているとも申しました。

食べることに難儀している人びとが「あさましき人々」であったのです。しかし、自ら好んでなったわけではありません。また、貧しいことは悲しいばかりではなく、老・病・死がたやすく「身」をおそうことを意味します。そんな現実に対して、私たちにはどのような対抗・防衛手段があるでしょうか。病・死のおそれ、不安から、「あさましき人々」が祈禱や呪術におもむくことがあったとしても、だれに批判ができるでしょうか。また、繰り返し食べられないことから、子どもを売ったり、やむなく盗むことがあったとしても、それを「ものもおぼえぬもの」、つまり、「物の道理もわきまえないもの」と、どうして批難ができるでしょうか。

まったくそこには、「身」に振り回され、身に埋没しきって生きる姿があるだけです。ですから、この「身」を離れるために、出るために、つまり生老病死をもつ「身」から自由になるために、身を省みたり、仏道の修行に専念することなど、この人びとには思いもよらないことなのです。そんなことより、直截に身の満足することを求めたでしょう。

さらに加えて、この「身」のところに、繰り返す男・女の性があります。実に、この「身」は繰り返す性によって誕生したものです。

また、「性」は身の誕生だけで終わらず、繰り返すことによって、貪りの愛をつのらせます。それによって、当然、さまざまな苦悩が私たちにもたらされます。愛しい者と別れなければならないという、愛別離苦がその典型でしょう。貪りの愛は、その裏返しとして、いかり、憎しみにも通じていきます。

このように繰り返しの性をもつ「身」を「我が身」とする私たちは、食べることでともなう苦悩以上の苦悩をもつことになります。たとえ、知識があろうと、地位があろうと、この性と愛に対しては、私たち誰もが「ものもおぼえぬあさましき人々」と

なり果てるよりほかはないのではないでしょうか。とすれば、やはり、この「身」に振り回され、「身」に埋没して生きるほか、どんな別の生き方も私たちは知らないのでしょう。

法然上人が「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」といわれた「愚＝愚かな者」とは、身のもつ二つの事実を隠すことも、やわらげることもできず、ただただ正直に生きざるをえなかった人びとのことなのでしょう。ここに「身」の発見があります。

従来から、仏教といえば智慧を得る道とされ、先に申しましたような「身」のもつ苦悩から離れることが目標とされてきました。そして、そこに膨大な観念体系が生み出されてきました。しかし、この観念体系は、もっと深く「身」に埋没していて、それだからこそ、もっと自由になることを願う人びとを、かえってしりぞけてきたのです。戒律が守れない、文字が読めない、修行ができない、といって切り捨ててきたのです。しかし、繰り返しの食べることと性のあるところに、私たちの「我が身」があり、また、この「身」はあらゆる人びとに共通する事実であり、その意味では、この「身」こそ、人間の大地といわなければならないものです。

この、「身」の発見というところに、法然・親鸞の信心の要があるといえるでしょう。

といいますのは、単に「身」を発見するということではなく、「愚身」＝愚かな身、として見い出されたからです。その「愚者になりて往生す」の「愚者になりて」がそのことをよくあらわしております。「愚者が往生する」というのではなく、「愚者になりて」です。この「なりて」というところに目覚めがあります。

なぜなら、私たちは決して「愚者になること」を願うものではないからです。逆です。「賢者になりたい」のですし、「力あるものになりたい」のです。だれが好んで愚かな者になりたいでしょうか。ですから、「愚者になりて」は自分自身への、「我が身」への目覚めをあらわすのです。

私たちはだれしも、「我が身」をたのみにして生きております。しかも、我が身としているその「身」は二つの繰り返しを離れることができない身であり、したがって、深く苦悩せざるをえない身です。そういう「身」を「我が身」とする私たちの生き方は、あたかも砂漠の中にオアシスを探すようにならざるをえません。なぜなら、誰も

好んで苦しむことを願わないからです。

親鸞の八十三歳の時の手紙に次のようなことばがあります。

わがみをたのみ、わがはからいのこころをもって、身・口・意のみだれごころをつくろい、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり。

（『血脈文集』聖典五九四頁）

二つの繰り返しをもつ身を「我が身」とする以上、乱れ心と戦わざるをえませんし、何も心にかかるものがないような顔をして生きていきたいのです。それを親鸞は「はからい」とも「自力」ともいいますが、つまり、「賢く」なって生きようとすることです。別の言い方をすれば、身を生きながら、身を離れようとすることです。これはできない相談です。ここが肝要なのです。「我が身」としている「身」を、我が力で解決しようとする計画のすべてができぬ相談と知れたところに、「愚者となりて」という自覚が生ずるのです。これは決して残念なことではなく、おおらかな目覚めなのです。大地ともいうべき身に、はじめて出会うことになります。

身のすくい

「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」。このことばについて話してきたのですが、「愚かな者」とは「我が身」という場合の「身」を見い出した者にほかなりません。親鸞の書かれたもの、語られたことばの中に実に多くの「身」のことばを見つけることができます。

たとえば、「極悪深重のみ」（『尊号真像銘文』聖典五三〇頁）とか、「無明煩悩われらがみにみちみちて」（『一念多念文意』聖典五四五頁）とか、「罪業の身」あるいは「かかるわるき身」（『御消息集（広本）』聖典五七二頁）といった使い方があり、一方ではまったくそれに反対の「功徳は行者の身にみてり」（『高僧和讃』聖典五〇〇頁）とか、「仏にかならずなるべきみ」（『尊号真像銘文』聖典五一三頁）、「智慧をえて仏になるべきみ」（『弥陀如来名号徳』）といった使い方があります。